

成果報告書

記入日 年 月 日

氏名 小倉 志穂	渡航先国名 タイ王国	所属機関 コンケン大学 芸術学部 音楽科
研究テーマ：タイの音楽教育における伝統音楽の役割とアイデンティティ形成ーコンケン大学の音楽活動を中心ー		
研究期間： 2016 年 7 月 ～ 2017 年 3 月		
<p>研究成果（概要）</p> <p>報告者はコンケン大学芸術学部音楽科に所属し、タイ人学生と授業を受講する傍ら、大学附属校へ毎週足を運び、教科書や授業内容の精査等、必要な調査を行った。また、校外の音楽行事にも参加し、人々が教育外でどのように伝統音楽、イサーン音楽に接しているかを観察した。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>① 大学の授業、及び各音楽技術の向上</p> <p>② 大学附属校、近辺学校への見学</p> <p>③ 音楽行事</p> <p>① 大学の授業、及び音楽技術の向上</p> <p>報告者はコンケン大学芸術学部音楽科にて、タイ古典音楽及びイサーン音楽（モーラム、タイ東北地方の民俗音楽）の授業をタイ人学生に交じって受講した。受講科目は、タイ音楽実技（ソードゥアン、歌）、タイ古典音楽基礎メロディー、タイ古典音楽理論、イサーン音楽実技（モーラム（歌）、ポンラン）と多岐にわたり、これらは全てタイ語での授業であったため、はじめは授業に追いつくことに苦戦したが、先生と友人の助けによりなんとか食らいつくことができた。</p> <p>授業を通して、受講内容はもちろん、タイ人がタイ音楽やイサーン音楽について、どの程度の事前知識があり、またどのような方法やモチベーションで学ぶのかを、垣間見ることができた。特に印象に残っている気づきとして、タイ人の文化や種類の異なる音楽をきちんと分別するという視点が挙げられる。ごく当たり前のように聞こえるかもしれないが、これはその音楽の境界線を自覚する、つまりそれぞれの相違点についてしっかり学ばなければできないことである。きちんとした知識を持ち、各々の音楽の境界線を自覚することによって、異なる文化を優劣でなく、違い、としてみることができる、この視点こそ、タイ音楽とイサーン音楽が共存できる所以ではないのかと考える。しかし、この気づきはまだ詰めるところがあるため、これから卒業論文に向けて詰めていきたい。</p> <p>また、授業の一環として、タイ古典音楽、イサーン音楽、両方の実技のレッスンを受講した。報告者は留学するまで、これらの実技習得の機会がなかったため、完全な初心者として実技習得に挑んだ。</p> <p>まずタイ古典音楽習得にあたって特に難しかったのが、タイ文字による楽譜の読解と、タイ古典音楽独特の 7 平均律の音階に耳を慣らすことであった。7 平均律とは 1 オクターブの音を 7 等分に分けた音階のことである。西洋音楽では 1 オクターブを 12 等分に分ける 12 平均律が用いられるが、この音階に親しんできた報告者にとって、7 平均律で音を認識し、また調弦したりすることが、慣れるまでは想像以上に困難であった。理論で事前に理解していても、いざ実践となると習得までに時間がかかってしまう、音楽特有の壁であった。</p> <p>対して、イサーン音楽は中国の影響がタイ古典音楽より強いせいか、音階は比較的 12 平均律に近く、報告者にとっては馴染みやすく、イサーン音楽楽器は比較的是やく習得ができた。しかし、同じイサーン音楽でもモーラ</p>		

ムの授業では、師匠の歌う伴奏なしのラムをひたすら習得しなければならなかったため、かなり苦戦をした。ラムは音階を歌うというより、声調にあった抑揚を音階のようにみなし、歌うもので、かつそれが師匠のスタイルから逸脱してはいけない、そして暗譜が必須、という、イサーン語にもまだ慣れず、楽譜で音楽を今までさらってきた外国人にはなかなかハードルの高いものであったが、イサーン語の歌詞しか書いていない楽譜に抑揚の目印をつけ、録音をひたすら聞き、練習した結果、なんとか2曲暗譜し歌うことができた。留学終了時に、この9か月で学んだ成果を発表する機会を学部から頂き、日本音楽（三味線）、西洋音楽（声楽）、タイ音楽（弦楽合奏）、イサーン音楽（器楽合奏）を演奏した。出来栄は他のタイ人学生に比べたらまだまだ至らない点があったが、異なる文化圏の音楽四種類を同じ演奏会の中で一挙に演奏できる機会は、大変貴重であり、このような機会を与えてくださった先生方には感謝してもしつくせない。

② 大学附属校、近辺学校への見学

コンケン大学の附属中高一貫校、小学校、そして県内の中高一貫校、小学校へ授業見学に行き、内容や教科書を精査し、また音楽の先生、生徒にインタビューをした。特に、コンケン大学附属中高一貫校へはほぼ毎週足を運び、授業や課外活動を細かく、深くみることができた。以下、授業見学等から得た成果を学校ごとにまとめてみた。

1. コンケン大学附属中高一貫校 及び 小学校

まず、日本でも比較的同じような傾向があるが、大学の附属校は他の学校より比較的裕福な学生が通い、予算もある。そのため、授業はタイ音楽だけでなく西洋音楽も用意され、タイ音楽に関してはタイ古典音楽、イサーン音楽の楽器が一式十分に用意されていた。教師陣も全員修士を最低でも卒業した優秀な方ばかりで、タイ音楽に至っては独自の教科書を作り、授業を進めていたほどである。

タイ音楽の授業は、1学期に理論、2学期に実技を行う。各学年で内容は異なるが、最終学年（高校3年）を終えるころには、タイ音楽、イサーン音楽に関する大方の知識と合奏を通しての実技習得が期待できるようなカリキュラムになっている。母の日や文化祭などの行事では、タイ古典音楽合奏を披露するなど、発表の機会も充実していた。

また、音楽だけでなく舞踊の学習も、タイ音楽の授業の中に組み込まれている。ラムウォン（男女で輪になって踊るタイの舞踊）といったベーシックな舞踊だけでなく、イサーン舞踊、北部の舞踊、南部の舞踊、中央部の舞踊など、各地域、民族の舞踊もグループを作って学習し、試験ではグループごとにその地域の伝統衣装をまとい、発表した。ちなみに、この舞踊学習、特にラムウォンに関してはタイ全国の学校で行われ、たとえ音楽の授業がなくともボーイスカウトや課外学習といったなんらかの形で必ず行われるものである。しかも、このラムウォンはもともとペッチャブーン（北部、ラオ・イサーン人が多く住む地域）のラムトーン（太鼓の踊り）を基に作られ、音楽もかなりラオ・イサーンの音楽に似た作りになっているのである。タイ全国でラオ・イサーン音楽を基にした舞踊が教育に導入されているというのは、とても興味深い点であり、これから更に精査していきたい点である。

2. 近辺学校

近辺の学校では音楽の授業がそもそもない学校も多かった。音楽の授業がある学校は上記の附属校とあまり大差がなかったため、割愛する。

音楽の授業がない学校でも、必ずといっていいほどボーイスカウトやキャンプを通してラムウォンを学習

していた。また、コンケン大学音楽科の生徒が有志でタイ音楽出張授業を行ったり、自分たちで楽器を購入、手作りしたり、またイサーン音楽の楽器、ポーンラーンの合奏を課外授業として行ったり等、タイ音楽、イサーン音楽にもなにかしらの形でアクセスができる状況であった。

③音楽行事

大学の外で行われた大きな音楽行事を以下の項目に分けて報告する。

1. 国王追悼行事

2016年10月13日、タイ国王プミポン・アドゥンヤデート国王が崩御した。崩御のニュースとともに国民は喪に服し、喪章をつけ、テレビやインターネットはモノクロに代わり、学校や会社の外壁等には白黒の布が飾られるなど、国全体が一気に灰色に変わる様子を感じずにはいられなかった。音楽行事やお祭りごとは最低でも一か月の間は自粛するよう促されたため、本来なら乾季とともにモーラム公演が始まる季節だったが、一か月の間は自粛せざるを得なかった。

約一か月後、国王追悼とモーラム公演シーズン序幕を兼ねたイベントが催され、イサーン地域にあるすべてのモーラム団体がコンケンに集まった。イベントでは熟練モーラムによる国王に哀悼の意を示す内容のモーラムなどが披露された。また、同じく崩御より一か月後、ちょうどロイクラトンの日に、コンケン大学芸術学部、及び卒業生を中心とした大学総出の追悼行事を開催した。タイ古典音楽、モーラム、ジャズ（プミポン国王はジャズ好きで有名で、国王が作曲した作品も多い）といった多岐にわたる演目が披露された。報告者も国王賛歌のコーラスで参加した。特にこの国王賛歌はタイ古典音楽、イサーン音楽、西洋音楽といったすべてのジャンルの楽器を組み合わせるとても大がかりなものであった。

タイを研究する身として、今回の国王崩御時に立ち会えたことは大変貴重なことであり、タイ国民にとっての国王の存在の大きさを、改めて身をもって感じる事ができた。70年という長い在位の中、常に国民に愛されてきたタイ国民の父、プミポン国王に、改めてここで哀悼の意を示したい。

③ ブンカオチャー

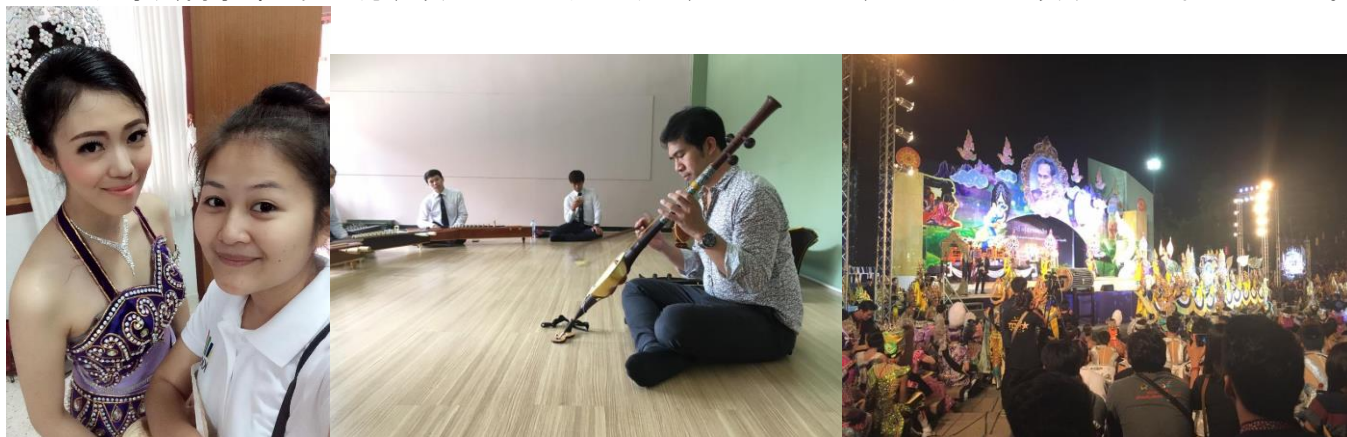
ブンカオチャーとは仏教の行事で、毎年2月上旬～中旬に行われる。カオチャーとは串に刺したもち米を卵と塩で下ごしらえをしてから火鉢等で焼く、いわば焼きおにぎりのような料理であり、このブンカオチャーでは参加者が火鉢を囲って夜通しでカオチャーを作り、翌朝、タンブン（寄進）をする。報告者はコンケン県内でもブンカオチャーで有名な寺院へ行き、行事に参加した。昼間の部では地域のお年寄りが集まって、各ブースに分かれてイサーン音楽や伝統工芸を教えるコーナーがあり、ブンカオチャーが地域の伝統芸能伝承の場になっている例を確認できた。また、境内では夜を徹してモーラムが披露され、コンケン大学や地元の高齢モーラム、また仏教モーラムといった珍しいモーラムもみることができた。

以上が留学中に実際に体験したこと、学んだことの大まかな内容である。留学前は学校現場の音楽教育を中心に意識していたが、舞踊教育やボーイスカウト、校外の行事等の可能性や影響にも注目して、タイにおける音楽教育、及び音楽の要素を含む教育が、どのようにその文化や人々に影響を及ぼしているのかについて、留学で得た資料やデータ分析を基にして卒業論文を仕上げたい。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学中、最後まで苦戦したのは言語や文化の違いよりも、体調管理だった。報告者は留学開始からわずか2週間で食中毒、脱水症状で入院し、そのあと雨季が終わる10月後半まで常に下痢と風邪との闘いで、なかなか薬が手放せなかった。日本から持参した薬がなくなり、タイの下痢止めを飲み始めた乾季は、体調不良もようやく落ち着き、常に薬を飲む生活からはなんとか解放された。それでも、2週間に1度は下痢気味になったりしたが、入院するほどには至らず、無事留学生生活を終えることができた。

所属機関であるコンケン大学芸術学部では、報告者が予想していた以上にコンサートや出張授業、キャンプなどの行事が多かった。多いのは嬉しいのだが、国民性なのか、直前に知らされる場合がほとんどで、タイの行事文化にまだまだ不慣れな報告者は大抵慌てふためく思いをした。学部でのモーラムパレードに参加したときは、パレードの1時間前にその旨を知らされ、手を引っ張られあれやあれやという間に厚化粧に派手な衣装をまといわれ、パレードに参加。また、上記の留学最後のコンサートも、帰国する約1週間前に、コンサート開催の旨を教授から伝えられ、帰国直前の本番までになんとか間に合うように練習に明け暮れた。しかし、この焦り具合は全て日本で育った報告者の感覚からくるもので、タイ人の先生や友人はとてもおおらかに、本番でもサポートしたり、励ましたりしてくれた。もっと早くに言ってくれば…!と、ひとり嘆きたい場面は何度もあったが、焦っても仕方がない、大丈夫、なんとかかなるさ、のタイ人のおおらかさに何度も救われた気持ちになった。同じアジアといえど、文化の違い、タイ語もまだまだ習得途中である外国人の報告者を、温かく受け入れ、常にサポートしてくれたコンケン大学芸術学部の先生方、友人たちのおかげで、またひとつ、またタイに戻りたい理由ができた。



左:モーラムパレード時の衣装 パレードでは踊りました 中央:タイ古典音楽の授業風景
右:モーラム国王追悼コンサート

今後の社会貢献

留学終了後、2年間かけて留学で得た成果を基に卒業論文を仕上げる。学部卒業後はタイの大学院へ進み、今回の留学中に訪ねた北ラオスの少数民族の村で音楽、音楽伝承の場、音楽教育をキーワードに調査を行いたいと考えている。様々な地域で同じキーワードの調査を重ね、最終的には音楽教育を通じた文化保護の可能性とその有用性を提示し、また自国の伝統音楽のみならず、諸地域、諸外国の音楽文化をも学ぶことについての有用性や方法、それによってみえてくる可能性についても議論していきたいと考えている。